

思想の歴史的探求は、実践における性急な判断を避けて、私たちに熟慮ある知へ導くとしても、他方では当面の判断を留保する結果として、実践的価値意識そのものを衰退させることになりかねない。思想史研究が熟慮ある知を導くためには、たんに過去の英知から学ぶだけでなく、現代の規範理論や思想との往復が不可欠である。例えば、私的所有に基づく交換経済の是非を問う場合、オルタナティブとなる「贈与関係」や「共同所有/非所有」の本質について検討することが合わせて必要になる。学史／思想史上の知見はこうした問題にさまざまな答えを与えてきたが、現代の知見を駆使しながら、学史研究との往復作業を通じて応じようというのが、本セッションの趣旨である。

贈与の問題は、例えば現代の論客であるグレーバーの経済思想を検討することによって、学史研究に新たな視点を与えるだろう。所有の問題は、これまでマルクス主義の経済思想のなかで豊かに語られてきたものの、現代の論客であるブレナーなどの視点を踏まえて、あるいはスミスやロックの貢献を別様に解釈することによって、新たに語り直すことができるだろう。

ここで取り上げるテーマは「贈与」と「所有」であるが、背景には現代の経済思想を体系的に研究するというプロジェクトがある。主流の経済学はこれまで、根本的な問題に定義以上の答えを与えてきたわけではない。例えば「経済」とはなにかと言えば、それは家政であり、節約であり、交換であって、そうした用語法の集積としてイメージされる。けれどもこれらの用語法の背後にまわって経済の本質をつかみとろうとすれば、関連する諸概念についての探究があわせて必要になる。経済の本質とは、すなわち資本主義の問題であり、価値の問題であり、あるいは欲望の問題等々であって、これらの問題がコロラリーをなしたところに答えを宿している。こうした数珠つなぎの問題系に取り組んだ成果として、私は拙編著『現代の経済思想』（勁草書房、2014年10月刊行、全体で22章、640頁）を世に問うた。本書において執筆者たちは、「〇〇とはなにか」という本質を問うスタイルを共有し、「いかに生きるべきか」「この社会はどうあるべきか」という実存的・規範理論的な問題に迫り、かかる問題にそれぞれ本腰を入れて応じている。現代の文献を猟歩して、新たな知の冒険へ乗り出している。ご参観いただければ幸いである。

本セッションは、かかるプロジェクトの一端をなしている。刊行された研究成果をそのまま敷衍するのではなく、学史／思想史研究の新たな視点を探りたい。報告者から追加考察をいただいた上で、それらを踏まえてコメンテーターおよびフロアとの討議に時間を割り、今後の糧としたい。